

津軽の人生

# トウキョウを作り、津軽に生きる 高度経済成長期、親方に連れられた出稼ぎ

作 道 信 介

## 目次

はじめに：出稼ぎのエートス

1. ホールドとしての出稼ぎ
2. 出稼ぎの語りと語りの出稼ぎ
3. Aさん
4. トウキョウへ

- 1) 募集と応募
- 2) 親方という仕事
- 3) 北海道の記憶

5. 埋め立て

- 1) 氷のうにドブロク
- 2) タコとボウズ
- 3) 重労働

6. 飯場

- 1) 食事と部屋
- 2) 語らい
- 3) 一匹オオカミ

7. タコ部屋

8. 津軽へ

- 1) 長男と書いて「使命」
- 2) 地元への配慮
- 3) その後

9. トウキョウを作り、津軽に生きる

おわりに：語りの贈り物

はじめに：出稼ぎのエートス

2006年6月1日付、朝日新聞は特集記事「分裂にっぽん：「雇用回復」の足元（中）」のなかで、青森市在住のある青年の場合をとりあげている。青年は高卒後、アルバイトなどを経験、豪雪による家屋の被害の修繕費をかせぐため、静岡県のとヨタ系の工場に勤めた。仕事では「歯車」になった気がするが、手取りは地元の1.5倍で「半年は辛抱」するという。記事はこの青年を青森における県外就職者の増加（平成16年、1万7千人）の事例としてあげ、青森労働局地方雇用計画官のこたばを引き、「昔の出稼ぎとは違う新しい形の出稼ぎ」ではないかと示唆している。

この記事には県外就職を出稼ぎの延長として扱う視点がある。そこには出稼ぎという稼働形態をそのときどきの生計の手段や、将来設計、危機における頼みの綱として自明視する地域的なエートスをみることができる。それは「豪雪の被害のため半年」と目的と期間を限定して県外就職した青年の、その家族の実践のなかに、そのような若者の県外就職を「新しい出稼ぎ」とみなす地元行政官の視線のうちに、さらには記事を書く記者の筆を持つ指先に、端的に現われている。このようなエートスの形成は、出稼ぎが長期間稼働水路として確立したため出稼ぎの生活への組み込みが起こった歴史的社会的経緯を反映している。

### 1. ホールドとしての出稼ぎ

本論は戦後に生まれ中卒後、高度経済成長期の出稼ぎに身をおき、現在は弘前に在住するひとりの男性出稼ぎ経験者、Aさんのライフヒストリーをもとにした論考である。私はAさんの語りを「ホールドとしての出稼ぎ仮説」（以下、ホールド仮説と略記）を支持する事例として用いるつもりである。

ホールド仮説は次のようにまとめられる（作道、2006）。戦後の出稼ぎの最盛期は全国的に見れば高度経済成長期の昭和47年である。この時期を境に、それまで出稼ぎ者を出出してきた地方周縁地域は急速に出稼ぎ者を減少させ、人口流出にみまわれた。それはあたかも出稼ぎが過疎の予兆であったかのようにであった。しかし、青森県は昭和49年に出稼ぎの最盛期を迎えた後、出稼ぎの減少はゆるやかで、人口減少も1990年代に至るまで顕著ではなかった。ホールド仮説は、青森県では、居住地にもどる出稼ぎという稼働形態が長期にわたって温存されてきたため、人口流出が抑制されてきたのではないかという推論にもとづいている。それは山下（2006）の人口動態の検証でも示されている。

これまで出稼ぎは、経済的格差の水圧のなか労働力が流出するというプッシュ・プルの枠組みのなかでとらえられてきた。それに対して、私は青森県の出稼ぎ、とくに出稼ぎの中心地である津軽地域の出稼ぎを「地域を形成し人を留め置く力」、ホールドの例として分析したのである。このホールド仮説の意義は出稼ぎという実践やそれが埋め込まれた生活が本人たちも気づかないうちに、帰るべき地域を形成してきたという社会構築主義的な過程を強調するところにある。

この過程を具体的に素描してみよう。まず、当地には戦前期から北海道や樺太へのニシン漁夫やヤマゴの季節的慣行があった（大川、1978）。とくにニシン漁夫は季節になれば、「ニシンの親方」が集落から漁夫となる農夫を募集し、「漁夫積み取り船」でおもに北海道東海岸に移送した。漁夫

は津軽の内陸部にいたるまで広範な地域から送出されたから、戦後になっても、この出稼ぎは集落の記憶のなかに留めておかれた。本格化した高度経済成長期以降の出稼ぎは稼働先を北海道から首都圏関東地方に移し、おもに建設現場に土木作業員を送りこんだ（渡辺・羽田、1987）。その出稼ぎの特徴は、建設現場の仕事が中心であること、知り合いのつてで仕事をみつける縁故就労と同じ職場に繰りかえし就労する継続就労が高いところにある。現在でも、出稼ぎ者の多くが見知った人間関係を介してなじみの建設現場で働いている。

地元の仕事仲間とともに稼働する縁故就労・継続就労という形態は稼働先において他地域からの出稼ぎ者との対比をうみ、集団としての凝集性を生み出す。それまで生活してきた地元は家族が生活し自分が稼ぎを仕送る故郷として意識される。また、製造業での仕事が全体の工程がわからないほど細分化された単純労働で、終日個人の仕事であるのに対して、建設業の仕事は共同作業であり工程がみわたせ、自分の貢献がたちとなって現れる仕事である。これら稼働形態・仕事内容は出稼ぎ者が地元との紐帯からはずれて一個の労働力、「歯車」となるのをさまたげる。

出稼ぎの意識構造はそれをささえる社会的過程、「妥当性の構造」を背後にもっている（Berger et.al., 1966）。まず国家レベルでは、出稼ぎは失業保険（雇用保険）制度の下支えをうけていることを確認しておこう。季節的な失業を繰り返す出稼ぎ者は相当の収入をこの半年おきの失業に対する給付という制度によっている。マスメディアでは、昭和44年4月2日の荒川放水路生き埋め事故以来、出稼ぎは社会問題化され、とくに危険な現場への劣悪な労働条件のもとの稼働をまねきやすい縁故就労が批判的となった。その後、集落や地元の行政レベルで出稼ぎへの制度的な対応「安心で明るい出稼ぎ」（県の出稼ぎ対策の標語）がなされていく。最終的に、マスメディアは失業保険改正問題を機に、「行きたくはないのだが、行かざるをえない」必要悪として出稼ぎを言説的に位置づけた（作道、1997）。この社会的過程によって、出稼ぎが地域で暮らすための選択肢として客観的にも主観的にも身近に存在する様態となる「出稼ぎのベースライン化」（作道、1991、118頁）が浸透していった。そして、それはある種の倫理的態度であるエートスを形成するに至った。冒頭述べたように、出稼ぎを自明視する意識が出稼ぎ者個人やその家族にはもちろんのこと、制度やマスメディア側にもあるのは、以上の社会的過程のなかで出稼ぎが構築されてきたという事情によるのである。

## 2. 出稼ぎの語りと語りの出稼ぎ

本論ではひとりの出稼ぎ者のライフヒストリーをたどることで「ホールドとしての出稼ぎ」を確認したい。ホールド仮説は研究者である私が出稼ぎを外側からとらえた外部観察によっている。出稼ぎ者自身は出稼ぎをどのように経験したのか、その内部観察からホールド仮説を検討するのが本論の目的である。仮説から事例へ、事例から仮説へという往復運動の一環と位置づけることができる。

内部観察は言語化できない観察である（大澤・郡司ベギオ、1996、73頁-76頁）。語りは事後反省的に行なわれる。そのとき、語り手は聞き手のやりとりのなかである筋を見だし、自己の経験を語る。私はここでの語りを、ライフヒストリーという語りの社会的・文化的プロトタイプにそった

語り手と聞き手の共同制作の結果として扱う。それは本論のインタビューが成立した経緯がまさに共同制作だったからである。

本論の語り手、Aさんは中学卒業後の12年を、神奈川県湾岸を中心とする高度経済成長期の首都圏（以下、トウキョウとよぶ）の土木建設の現場ですごしてきた。その間、Aさんは地元では容易に稼げない額の仕送りを地元にしつづけ、家計を助け、兄弟姉妹を援助して、家産を増やしてきた。このような背景を知るきっかけになったのは、Aさんが私の出稼ぎの調査報告書（作道、2005）の校正担当者だったことによる。校正は数度にわたったが、あるとき、その丁寧な校正が字面だけではなく内容を読んだうえでの控えめな助言であることに気がついた。Aさんにたずねると、Aさん自身も出稼ぎ経験者だという。早速、その経験をききとるためインタビューを依頼した。2005、6年に2回のインタビューを合計5時間余り実施、文章化し、それをさらにAさんに戻し校正をお願いした。本論で用いる語りは、インタビューの語り手自身が校訂し注釈したテキストである。注釈はインタビュー場面で聞き手と語り手が暗黙のうちに共有したかのように思われた前提をあきらかにしてくれる。分析では、ときに注釈を語り理解の重要な部分として用いている。

語りの取り扱いには、語りを経験と独立した言説として扱う立場と語り即経験とする立場がある（Atkinson,P & Delamont,S.,2006）。私は人類学者で精神医学の臨床家でもあるクライマンが『病いの語り』（Kleinman,1988）でとった立場をとりたい。それによれば、語りは文化的表象、集合的経験、個人的経験が重なり合って生成される。この3点から語りを検討することで、語り手の経験やおかれた社会環境を理解することができる。重要なのは、この語りが援助を求める語り手と援助をしたい聞き手の志向性のなかで、臨床リアリティを構成するという指摘である。臨床家にとって、「目下の問題を定義し、相手が治療的な行為をどのようなものだと思っているのかを知ること」（Kleinman,1988 江口ら訳 65頁）である。

同様に、私はここでの語りを出稼ぎのリアリティをめざして、私と語り手の間でライフヒストリーというプロトタイプにそって生成された語りにとらえる。この立場は語りから経験への接近することができるとする立場である。ただし、経験への接近が可能なのは、「出稼ぎとはどのような経験か」という志向性のもとに、話を引き出そうとする聞き手と伝えようとする語り手が語りを生成し、互いの経験、想像力と記憶を動員して出稼ぎのリアリティを構成する過程をつうじてである。本論がめざすのはそのようなリアリティの構成である。

### 3. Aさん

昭和16年に弘前市近郊に4人兄弟二人姉妹の長男として出生。2反歩ほどの田畑しかなかった零細農家で、父や姉が卵を自転車で町場に売りにいったりしていたという。工業高校への進学は決まっていた。しかし、父の病気のため進学を断念、中卒後すぐ、昭和30年4月から、ほぼ通年で出稼ぎを始める。主な出稼ぎ先は昭和30年、神奈川県川崎市大師の産業道路の埋め立て工事に、日給800円で働いたのを皮切りに、昭和35年、同じくT燃料の埋め立て、昭和37年、N製粉横浜磯子工場の埋め立て、昭和40年、横浜南区の隧道掘り（下水道）に月27,8万円で3ヶ月つとめた後、同年、神奈川県寒川の県浄水場建設、最後に、昭和42年、横浜港での、ドルフィン（係船杭：港湾内に杭など

を打ち込んで造る係留施設)建設に4ヶ月従事した。昭和42年(26才)のとき、地元にもどり結婚、兼業農家を営む。現在では2町余りの田畑をもっている。第3人のうち、1人は地元で兼業農家、二人は名古屋と東京に在住し、姉妹は近在に婚出している。

Aさんの出稼ぎは15歳の春から26歳の春まで、昭和30年から42年までの約12年間であり、青森県の出稼ぎが最盛期を迎える前に終わっている。Aさんの出稼ぎは、出稼ぎ者が急増して賃金不払いや労務災害によって出稼ぎが社会問題となる以前の、高度経済成長期前期の出稼ぎの事情を伝えている。Aさんは仲間のなかでは最年少者で、たいていは10歳以上年上の人だったというから、彼の稼働仲間は昭和一桁生まれが主に占めていたと思われる。これは山下(2006)が言う津軽に残留した世代にあたる。

Aさんは、初めての出稼ぎから地元で職を見つけるまでを語っている。そのなかから、とくに初期の埋め立て工事の出稼ぎに焦点をあて、就労経路と仕事内容、稼働先の生活を中心に抜き出し、出稼ぎとはどのような経験だったかをみていく。語りにはAさん自身による校正がふされている。これはインタビュー中には明確に示されなかった事柄をAさんが後で書き加えた文章で、文中では\*太字で示してある。ほかに、本文中の<>は聞き手(S)の発言、( )は補足、・・は前後の語りの省略である。なお、用いた図はAさんの手によるものである。

Aさんが親方に連れられて初めての出稼ぎに行く場面から始めよう。

#### 4. トウキョウへ

##### 1) 募集と応募

病気に倒れた父は「すぐうちの近くであったし、かなり親類づきあいもしてあった」親方(世話役)にAさんを連れて行ってくれるように頼みにいった。

うちのせがれを頼む

A これがさ、隣近所から結構行ってあって、ええ。でやっぱり隣近所の、うちの親父が頼みにいったってゆう。まあうちの親父がまあ、病気で入院しなきゃだめだと、だからうちのせがれを一つ頼むと。うん、こうゆう感じで、うん。

S あーじゃ、Aさんのお父さんが頼みに行ったんですか？

A そうです。で、私はまあその当時は高校に行くという夢があって、ええ。段取りは組んであったんですけども、まあ急遽さうゆう事情でね。

S 紹介を、頼んだ相手の人っていうのは、親父(おやじ)という...

A やっぱりその当時、50\*40歳代ぐらいで、あの、まあ赤線っちゅうあのまあね(帽子に赤線がはいった人だった)。世話役ってゆうか。人数集めて、一人頭\*人夫頭、あの親方、班長になるためには大体さうゆう自分で募集した人間を一人でも多く連れてけば、位が上がってくんですよ。

全国各地で親方が募集人として働いていた。親方は自身も現場で働く出稼ぎ者で、会社に頼まれて人を集めて連れていくのが仕事のひとつである。親方は一社専属ではなく、多くの会社から働き手の確保を依頼される。出稼ぎ者は会社は変わっても親方は変わらないというかたちで就労する。



親方のあれだけで

A ただ、会社もさ。親方は同じだから会社、2つくらい違ってても、同じなんですよ。

S あ、なるほど。

A 会社は、どこの会社だかなんもわかんねえぐらい。親方のあれだけで、行ってるからね。

\*ほかにもK特殊金属の排水工事、アパート工事とか（同じ親方でも）別の会社で働いたこともある

親方は多くの人を集めると、歩合で手数料がもらえたり、仕事や宿舎で優遇されたという。

会社は職業安定所（当時）に求人票を出して募集する。親方による募集はどのような意味があったのだろうか。

どういう人だかわからないから

ええと、やっぱり向こうから、たとえば、T建設とか、M建設とかってさ、そういうところからあの、市内へ、安定所に行くんですよ（求人票が安定所にいく）。弘前の安定所に。して、それを今度、（不明）希望出して、それから今度、部落回るしたよね。その当時話し聞いてればね。・・・まず初めて試す人は、どういう人間だかも分かんないし、その当時も例えば、T建設ってこうちょっとした、こう印刷物もってくるんだけど、それも今みたいにワープロとかさうゆうのでなく、活字であったわけだよね。・・・昔のね。あのきたない活字で。わら半紙みたいので印刷して、ええ。してやって、日雇い募集とかって、こうでっかいあれで。<はぁはぁ、チラシですか？>ええ。して、その当時はやっぱり名刺持ってたいね。ええ、そういうの持って、まっさうゆう、T建設のそのW組とかってあって、こっから今こういう募集に来て。ええ、例えば、それにええ、金額は一日に1000円（2000円？）保障とかね。ええ、残業も多くあって、3000円にばなるとかってこうなれば<ははは（笑い）>やっぱりねえ、ええ、その当時はもう、300円、多くとって300円か、そこらだと思いましたよ。あのー地元では、<あーそうですか>せば、その当時、まっ2000円から3000円って言えば、まっみんなね。こう、部落単位で、二人（手）か三方に分かれるんだいね。<ああ>でもやっぱり自分たちって仲間同士、仲間たち、こう、心が知り合ったのでやっぱりかたまっね。・・・ええ。向こうに行けば、同じ会社でね仲間で行ってたっていう感じですよ。

安定所が「どういう人間だかも分らない」人を雇わなければならないのに対して、親方が面接をしてどこの人間かわかった人を雇おうとしたということである。雇われる側も「心が知り合った」仲間で就労できるというメリットがあった。このような親方が集落に複数いて募集していたことがわかる。また、賃金の高さが魅力だったとも言われている。親方は集団生活に適応して働ける人材を選ぶ、人材発掘のフィルターとしての役割を果たしていた。それは共同体的な倫理的フィルターであることが以下の語りで示されている。

心が通じ合う人間だけ

<この40代の親方、Sさんという人は、同じ集落に住んでたんですか？>集落に住んでる・・・やっぱりこの、便が良かったとこで、ま、そこさ行けば、あの、ここから募集来たかとかね。そこの家さ行けば何とかなると。<なるほど>うん。そいで今度あの一、その一Sさんが今度、村の行きそ

うな自分のこう<知ってる人を>うん、合わない人もあるわけだよね。心がね。心が通じ合うような人間、だけ集めるわけ。<あーなるほど、なるほど>それが大切な、その最重要なあれになってるとは、聞きたいね。<あ、Sさんから？>ええ、まゝ朝っから飲んで、仕事大儀がって出ない、そういう人間は入れないと。そういうの連れてけば結局、みんなでそういう心が乗り移っていくわけだね。<移っちゃうって言うかね>うんうん。まゝ気持ちぴっと持てば絶対そういうことはないけども、やあ、あれも休んだし、今日はおらも休むかっとか。そういうの。

## 2) 親方という仕事

現場では、親方は比較的軽い作業もするものの、おもな仕事は誰が仕事に出て何時間働いたか、残業をどの程度したかといった人事管理、新人への教育にあたっていた。

### 出面管理

S これ、親方自身も向こう行ったら一緒に働くんですか？

A 一緒に働いて\*軽い作業をします・・・結局まゝあの、出面(ですら)っちゅうか出る。うん、その朝から晩まで、誰がどういう仕事をしたって言う、その、出面(ここでは「でんめん」と言っている)をつけるんだいね。帳面を持って。で、誰が1時間早く出たとか、誰が、誰々がああ、1時間残業したとかって。

S あーそういうことやってる

A ええ、それをつけて、まゝその、会社の人間(事務)にいて、判子ついてくると。確認に回ってくると。

### 新人教育

S 本人はこう、あの物運んだりとかその、そういう仕事はしないんですか？

A ほとんどしないね。

S はああ、管理。

A たとえば、われわれ、ま、若いときは、もう10代のときは、あ、20代前のときは、やっぱり親方の手ほどきで大体仕事覚えていくんだいね。

S はああ、なるほど。

A それからあと一、目で慣れるとか、その当時からまゝあの、お金かけたり、仕事教えたりとかゆう、大工さんとか、左官さんは、ほとんどその一、仕事は見るように慣れるっていう、そういう言い伝えがあってね。

S ああーそうでしょうね。

A われわれも頭(かしら)はそうゆうふう、っちゅうか、それがまゝ普通常識なんだけどね。

人材発掘も就労後の現場での親方の仕事である。出面管理や仕事をみて「能力のある人間」を見いだしていく。

### 人材発掘

A やっぱり親方の能力があればであれば、機械を使う仕事とま、スコップとつるはし、うん、

その系統のほうに分けるんですよ。でもやっぱり今度、その途中からまあ能力がある人間っちゅうかね、ええ。昔はあのほとんど計算機もなかったからそろばんの出来る人間とか・・・そうゆうのが重要視されてたったいね。

S こう見出されていって、親方が大体こう、この人はいけるなと思ってね。

A それで指図されて行けばまたその、会社直属のこの、また班があって、そこであのやれるようになれば、まあ大体一人前くらいに、そこで慣れてしまえばね。もう私もその途中からもうそうゆう方に回されて、ええ。ただそれに回されれば今度、うちの人との場所が飯場が全然違うんですよ。はい。ま、そこに行くとき度、まあ推薦されていって言えばいいか、ええ、まあ同じ仕事場でやってもだめだから、地区から一人とか二人でも代表出して、そしてやってけばあのお、まあそのお、班も世話役の班も将来楽だっちゅうか、永年勤められるとか、色々あるんですよ。

選ばれた人は朝他の人より30分ほど早く現場に出て打ち合わせをしなければならない。しかし、給料は3割増しであったという。人材の抜擢は親方の評価をあげることにもなる。Aさんも親方に見いだされた人材である。後に、免許をとり運転手やウインチなど機械の操作、出面管理まで任せられるようになる。

標準語を話せることも親方の条件だった。会社との契約や待遇の改善などの仕事にあっていた。

#### 通訳

やっぱりその当時はさ、この、方言が丸出しで、なかなか標準語っちゅうのは、しゃべれなかったんだよね。〈なるほど〉やっぱりその、何ぼかそういう、つてが、ものをもったんでな(いかな?)、親方の、世話役になってね。〈親方は、標準語がしゃべれるっていうか・・・〉ええ。というのが、やっぱり、自分の兄弟が、東京のほうにあの、若いときっちゅうか、集団就職みたいな感じで・・・移らったからね。そういうところに入りしてるみたいなので、やっぱり標準語は上手いんですよ。で、こっちは人はやっぱり20代30代前になってもやっぱり、方言が取れないんですよ。〈うん、なかなか〉なかなか、通訳、入れないと話しできないわけさ。うん。仕事さ行っても。〈いまは、津軽弁もテレビとかでも取り上げられたりしているけど、昔はねえ・・・〉うん、それが普通のもう、うん、津軽弁って何で悪いんだっつうくらいの感じで。絶対、うん。いい言葉にならなかつたいねえ。昭和37、8年くらいでテレビとかそういうの入ってきて、うん、その前からあるんだけど、もう村に一台とかね、電話も一台とか、そのくらいよりなかった時代ですからね。昭和30年ごろはね。ええ。

納期に間に合ったとか、仕事の区切りには親方は出稼ぎ者を連れて慰安旅行もしたという。会社も良質な人材を確保するため厚生に気を配っていた。

#### 慰安

A 最終的にあの一われわれは会津方面から来た方と一緒にね、あの色んなところにもあの、慰安旅行みたいのもしたしね。〈仲良くなっちゃったっていうか〉ああ。で、一緒にあのお、ホテルに行って一晩泊まって、ええ、やっぱり仕事完成したときとかね。期日に終わ



れないで、あの正しくあの、期日に合ったときとかは、その親方がね、ええ。工事で結構、熱海のわれわれ行ったときは、ハトヤであったけかな。<「おーい、ハトヤ」(まちがったCMのまね) ですね>なーんていってあったけな。そういった名前のあの、ちょっと度忘れしたけども、ああ、5階か6階ぐらいのあの、大きい、あの旅館でね。ええ。

S あれ、やっぱりお金もみんなそれなり持ってるわけですよね？

A ええ、なんも親方全部やってね。

S あ、親方がやってくれるんですか？

A 全部お金出してね。ええ。

S やっぱり親方はある程度、会社のほうからお金貰うわけですよね？

A ええ、それは親方は、まゝ次ぎ連れてくるために、会社のほうでもそういう仕向けてくれるんだいね。

S ああー。そうか、あんまり待遇が良くないと、次来ないかもしれないから、

A 次の、他の会社に行くっていうあれもあるしね。

一緒に出稼ぎにいった仲間とは帰ってからもつきあいはあった。出稼ぎ者は農作業にあわせて帰郷する。それが終わってから「酒盛り」に出た。

仲間

S するとこれ、一緒に出稼ぎに行った人とは、じゃあ帰ってきてからも付き合いあるわけですかね。

A うん、それ1回、まゝみんな農家の仕事済んでから、結構横のつながりはね。<つながりはあったと>今回、われわれ行ってその、相手の人が行かない場合も、いろんな仕事の面とか、ええ。であのう、土地改良のそういうもの、自分のは行かれないときもあるわけだ いね。せばま、1年、ま仕事のあれからいけば、1年こう、交替ちゅうかね。うん1回りまた、こう1年でも遅れていれば(早くからいっていれば)、年功、うん、年功者という ことで。\*つながりはありましたね

S 先輩ちゅうかね。

A 先輩ちゅうか。せ、金額も・・まゝあの当然これ\*当時50円から100円ぐらいだったべ の。続けて行けばなんかそういうあれ\*割り増しがあったんですよ。<なるほど>それは、まゝ今の社会でもあるけどもね。うん、経験が積んであるってことで、まゝ、ある程度誠意を持って働かせてもらうしね。

S うん。まゝ気心が知れているということで、

A そうそうそうそう。

S 帰ってきてからもまゝ、付き合いはあると。

A うん。だから、まゝ行って、まゝあれしちゃったと(出稼ぎにいった稼いで帰ってきたからひけめがあつて)、してまゝ晩に酒盛りしたりね。今で言う鍛冶町(弘前の中心飲食店街)はなかったけれども、その辺の富田とか、その辺の飲み屋っこでね。

このインタビューからは、親方についた人たちが、その年に農事などで出稼ぎにいけなかった人

を誘って弘前の町場で飲んだことがわかる。「交替」という表現からは、ある親方について人たちが一種の出稼ぎ集団を形成していたことがわかる。集落内ではなく、わざわざ町場で酒宴を開いたという事実は経験をともにした者同士の凝集性を表すとともに、このつながりが通常の集落内のつながりとは別であることを示唆している。

以上からまとめると、親方は以前からの出稼ぎ者で会社の人材募集を請け負った世話役である。自らが居住する近在から出稼ぎ希望者を募る。Aさんの場合のように、あの人のところにいけばいいと知られている人である。地元では、集団就労の出稼ぎにふさわしい人を選別するフィルターの役割を果たしていた。「心が知り合った」仲間を集めたのである。これは現場でも同様で、労務管理をつうじて能力ある人材を見つけて登用するフィルターでもあった。また、労働条件や待遇の取り決めや改善もし、仲間の融和もはかった。人事や労務全般のマネジメントの任にあたっていたといえるだろう。親方は、適性をみて人材を選抜・管理・登用をするから、共同体的な倫理のフィルターである。濾過されて集まった出稼ぎ者は近在の人びとからなる出稼ぎ集団を形成して、親方への信頼のもと、凝集性をもって稼働していた。

### 3) 北海道の記憶

Aさんの父親が親方に頼みにいき、Aさんも出て行ったのは背景には出稼ぎが身近なものとして記憶されているからでもあろう。Aさんはニシン漁の成功譚を覚えていた。

#### ニシン漁

こっちからはすぐく（北海道へ）行ったらしいですよ。・・・うちの向かいのおじいちゃん亡くなったけども、北海道・樺太にあの、ニシンのあれで行ったってな。・・・あー。うちのあたりで、北海道のそのニシン獲りに行って、田畑全部買ったって。・・・別な農家の次男坊だか四男坊に生まれたんだけど、すごいいいあの、生活してね。・・・うん。そんなかんじでね。がんばったって。裸一貫から儲けた人だって。

すでに出稼ぎ先の中心は北海道からトウキョウに移っていた。北海道の山仕事にいていた人や蟹工船にのっていた人が親方に斡旋を依頼にきたのをAさんは覚えている。

#### 北海道からの転進

A で、その方が毎年、昭和34・5年のあたりだかさ、毎年北海道さ行ってたのが、肉ね。味噌漬けにした鹿の肉だってさ。\* 食べながら春に俺を連れて行ってくださいと私たちの親方 にお願いに来ました。

A こっちはわれわれのあれでいけばあの、遠い仲間のあれなんだけども、蟹のあの、乾燥したやつね。カニの足の。北海道の独航船、蟹獲り独航船さ乗った仲間とかの。

A それから（海から）上がってきて、われわれと一緒に仕事したんだけどね。

S あー、そうかそうか。終わってっていうかあの

A うん。獲れなくなったって、あれでね。

5. 埋め立て

1) 氷のうにドブロク

出稼ぎのスケジュールは農作業にあわせてある。Aさんの家では、果樹（リンゴ）と水田耕作を行っていた。5月から出稼ぎに出て、8月7日のネプタ講で帰ってくる、お盆をすませて、20日頃出る。10月末に稲刈りで帰省、さらに11月20日頃に「ゆきのした」（国光）を収穫した後、出稼ぎに出て、4月の花見に戻ってくる。だから、だいたい6ヶ月単位で戻ってくるようになっている。これは失業保険（出稼ぎ一時金）の受給のためでもある。

列車の切符は親方が用意してくれた。交通費は会社もちであった。急行列車は15時間かかって上野に着く。身の回りのものを鞆に入れ、寝酒は一升瓶にいれたドブロクで、瓶は通路にならべておく。それとは別に、氷枕につめたドブロクも持って行った。これは現場で仲間と飲んだり、他地域からの出稼ぎ者と交流するためだった。16歳のAさんは自分では飲まなかったという。しかし、礼儀として親が用意してくれた。現場の最寄り駅からはタクシーで飯場までいく。

最初の仕事は神奈川県産業道路建設のための湾岸の埋め立てであった。沖に金属の矢板（パイル）をうちこんで海岸を囲む。水がはけていくから、そこに3、4メートルで先を刃広（はびろ）という工具で尖らせた松の杭を1、2メートル間隔で打ち込んでいく。その松の木を支えにして鉄筋を張っていき、セメントを流し込んで「波返し」という30センチ幅の一種の護岸をつくっていく（図1の丸でかこんだ部分）。この内側が埋め立て地になる。そこに海からくみ上げた砂や搬入した玉砂利などをいれ整地していく。Aさんたちが取り組むのは松の木の打ち込みから整地までの仕事である。

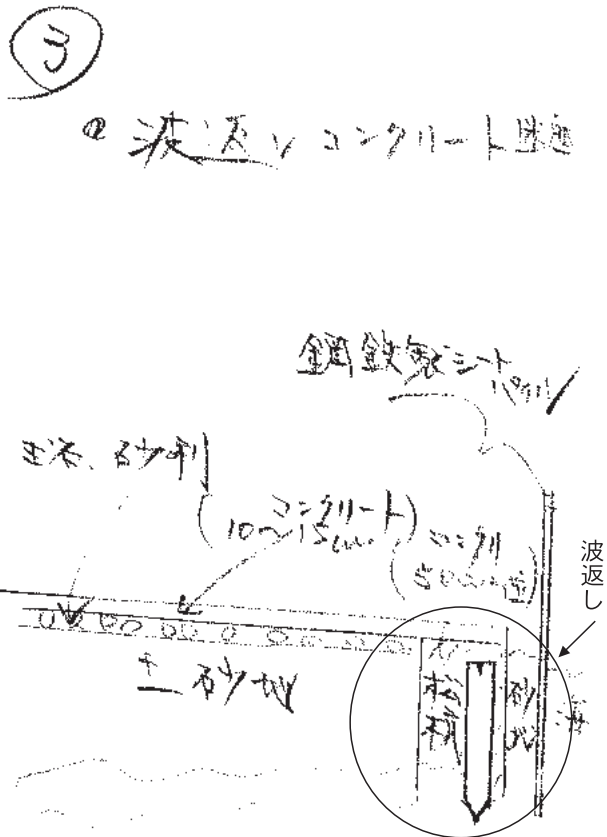


図1. 波返し

2) タコとボウズ

波返しは埋め立ての前線である。沖合にむかって何百本も松の大きなくいをうちこんでいく。松の杭の後ろには鉄の棒がつけられており、それを心矢という鉄のおもりでたたく。Aさんたち

は、心矢を滑車でひっぱりあげては打ち込んでいく。心矢には穴があり、そこに杭の鉄棒が入るように導いて、逸れないようにしている。つまり、松のクイは自分のおしりにつきさした鉄棒とおったハンマーで打ち込まれていく。この工夫をボウズという（図2）。海中には潜水夫がいて松の先を誘導する。海側にはボートがいて三脚のひとつを支えている。

ボウズ

A 打ち込むのは大体、15センチか20センチくらいだべの。うん、太いのもあるけどね。それまた打つにはさ、三脚というものを立てて、そしてそのときから、とび職ちゅうか興味あってね。なかなか頭いいものを、頭いいものだなっていうのはあって。その三脚までの棒をこう、三本立てて、あボウズっていうんだいな、あの一名称としてはね。・・・うん。それはその丸太、電柱みたいな丸太で。

S はあ、それ打ち込むには力いりますよね？

A それ今度さ、その一打ち込むときの力のあの心矢（シンヤ）ちゅうのが

あるわけよ。あの、わかるか。本当はこう書いて説明すれば一番わかるんだけどもねえ。あの一なんか違う紙でもいいんだけども、<はい、こちらで>これがまた、すごいやり方があるんですよ。こう、こう三本立ててね。でまあこう。でここのところが陸なんだけれども、こっちは海なんでこれをあの、ボートちゅうかあの、こうゆう船（イカダ）があるんですよ。うん、沈まないようなあの船があって。<はあはあはあ>それでまあ、機械とかつけて、ええ、やるんですけども。でこれがあの、鉄の棒があるんですよ。大体あの当時でいけば5センチくらい太い、鉄のこの、鉄の棒があって。でこれにあの、今は機械化されて、えーとワイヤーついてね、ここさこう滑車がついて、ええ、でまあ別にいた人間で引っ張って、これを上下させて松の杭をまあ打ち込んでいくと。

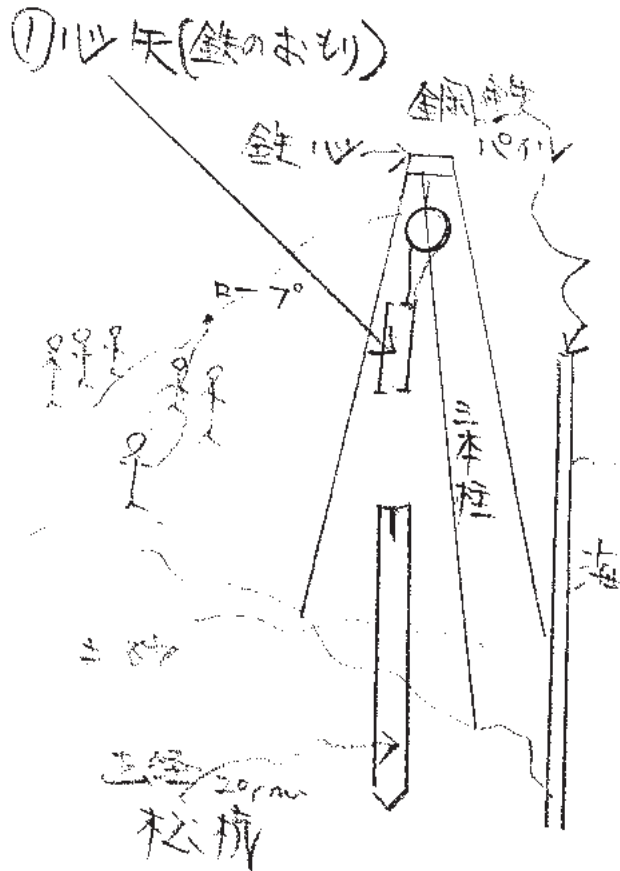


図2. ボウズ

打ち込まれた杭と杭の間に板をはって、その内側を排水したり乾燥させたりして埋め立てが進んでいく。杭の内側では運んできた砂利や土で地面をつくっていく。タコ（図3）はその地面をならす道具である。

タコ

ほとんどあのねえ、その当時はあの、ブル（ブルドーザー）もまゝあったんですけども、<ブルでこう寄せてきますよね？>ええ。それを人間の手でこう、平らに直していくとか。それからあともう、今でいうあの、こう、木でこう、4本ぐらいこう、あの、手がこうついて、それに縄つけて6人ぐらいで大体30キ口から40キ口ぐらいの、せ、タコちゅうんだけども、<タコ？>ええ、タコ。まゝタコをひっくり返したような、うん、海にいる魚のタコ…あれをひっくり返したような感じのもの。ええ。でなかであの、まゝ大きい松の木とか、それに鉄のあの塊とかこう、重い、重石ですね。して、それをなぜ、何に使ったかっていうと、ま、玉石とか砂利とか土とかを固めるために。<あー今はなんか機械で…>黙ってどどどってやってあるでしょ。あれの代わりですよ。

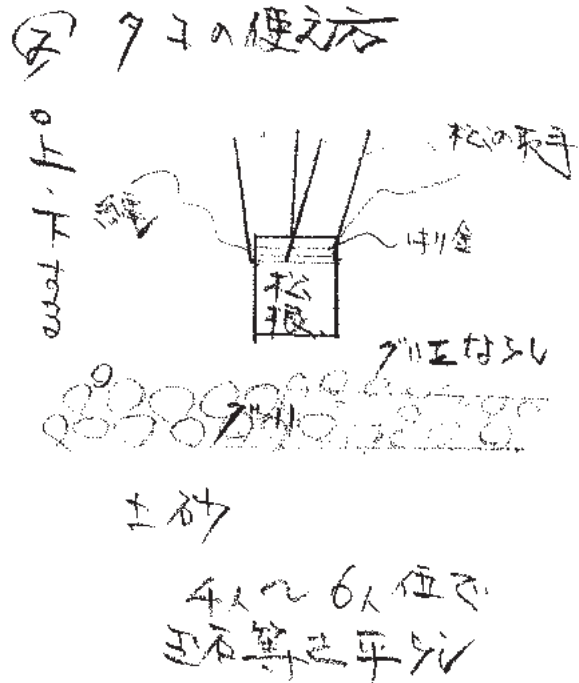


図3. タコ

どちらの仕事も4, 5人で声を合わせて行なう作業である。ボウズもタコも具体的には作業の中で使う道具を指す。それがボウズやタコといったおかしみのある愛称でよばれるのは共同作業の相方のようなニュアンスがある。Aさんが現場の全体の工程を知っているのも特徴である。

### 3) 重労働

機械化がすすんでいないため、作業は重労働であった。別の語りで、Aさんは「原始的」と表現している。それでも、地元にくらべれば機械化はすすんでいて、初めて、ねこ車（一輪の手押し車）やミキサー車を見たのもこの現場だった。当時、地元ではねこ車がなく、「時代劇に出てくる」もっこをつかって運んでいた。ミキサー車が入ってくるのは34,5年ごろで、この30年ごろにはたとえば、整地したあとコンクリートを敷いていく作業もまだミキサーがなく手作業だった。

重労働

ええ。コンクリあの、大体2メートルぐらいの、あれさ、こっち、3メートル50ぐらいの、大き



い鉄板で、4人くらいでない(持ちあがらないほどの)、うん、それにあの、ネコグルマっていう、二つ車のついたネコグルマっていうね。それで大体砂1杯に砂利3杯くらい、でセメントを1袋半くらいであったべな。<袋>袋。まああれ、30キロくらい入ったったと思うけど、今ちょっと忘れ、度忘れしたけども。とにかく、セメントは重いという感じは受けたいね。もうやっぱり二つっていう重さは、米一俵くらいに相当するという感じ受けてあったけども。・ええ。60キロくらいあったと思うけどもね。それみんな力いい人は、若いときはふたつ(2個)ずつたなえて歩いたもんですよ。(オート三輪で運んできた袋をそれぞれのところにもっていき)開いてこねて、で、切り替えしてって、して水かける人は水かけてね\*津軽のグループと会津のグループで30人ほどで仕事をした。

Aさんは重労働であったことを「まあその当時は60歳代で出稼ぎするっていうえば、よっぽどの(身体のよい)人間でない、だめだからね。大体20代と45、45か50代でもう、出稼ぎをやめるんですよ。重労働だということだね。もう45、50くらいになると体がぼろぼろになったるみたいですよ」と言う。後に青森県の特徴としていわれる出稼ぎの高齢化が可能なのは出稼ぎ現場の機械化が不可欠だった。

このような重労働はつらくはなかつたろうか。「われわれはその若いときだからもう苦痛はなんも全然なかつたもね。毎日面白く仕事、一回行けばいくらになるんだちゅう計算とかね、してあったから」という。「稼げるだけ稼ぐ」という気持ちでいた。「ええ。まああの当時は朝7時から晩、5時ごろまでね。それが大体一日のあれなんですよ。でまあ今、夏場の場合はまあ日が長いから2時間3時間って\*延ばして稼いだ」という。残業が魅力だった。1時間の残業は1日分の日給の1割と数えられる。当時の働きぶりは「あーもとはもう8時間労働とかっていうより、そういうあれ、なかつたからね。もう、ご飯食べて30分くらい休めば、昼ご飯でも食べれば、もうすぐ仕事につくっていう。その仕事ぶりで、親方もまあ青森県の人間は働く。まあそうゆうふうな認め方でね」というほどで、Aさんらは1日1000円稼いでいたから、残業の手当は、1時間で100円、2時間で200円程度つくことになる。地元で働いたとなると、「朝からあの、ドカ弁、積んでこの、でっかい弁当も積んで、1日行っても200円前後」だったから、残業で地元の一日分をかせることができた。

「稼ぐだけ稼ぐ」という背後には他地域からの出稼ぎ者への対抗意識もあった。しかし、基本的には「うん。あの当時はやっぱり、われわれの当時の方はやっぱり身内が、兄弟とか、そういうのいるからやっぱり、長く勤められるちゅうか」という気持ちがあった。稼いだお金は手元に置いておくと不安なので、郵便局に貯金し、50万ほどたまると現金書留で父親に送った。その援助で兄弟は学校を出ることができ、姉妹を結婚させることができた、家産も増えたと父親はいたく感謝していたという。

仕送りで助かった

うちの父親としては、稼いできたお金、その当時としてはすごいお金でね。ええ。でまあ子どもたちを高校にやったりね。ええ。そうしてるうちに姉を嫁にやるとか。まあ多少の貯えはあったと

思うんけども、(不明) すごくあの一助かったってね。親父が60代になってあたって亡くなるまでそれは言われたったね。<感謝されてたってことですよね> 稼いだお金で、あの、田んぼも増やせたしということだね。ええ。畑も増やせたしということで。ええ。

## 6. 飯場

### 1) 食事と部屋

「タコとボウズ」のあと、各地域ごとに競争心があったことを話すと、Aさんは風邪の流行を思い出した。

#### 風邪の蔓延

私たちはその川崎の飯場に入ったときに昭和、33、4年かなあ。あの、東京であのすごい風邪が流行って・・・160人くらいいる飯場、4つほど飯場(棟)があったんですよ。・・・でそのうちの、それに大体35人から40人くらい、寝起きしてあったんですよ。でその風邪流行って、そしたらなんか香港\*アジア? 風邪だっていうあれで、その当時はその一川崎の保健所\*開業医だったか? からすごいあの、何でしょう、あの、お医者さんたちすごい車で来て、全部に注射打ってね。で風邪引かない人間がああ、その当時160人くらいいたった飯場に5、6人よりいなかったんですよ。風邪引かないほうが。もうほとんど重労働だから、ほとんどもう1週間くらいのうちにもう蔓延してしまっただけ。

風邪が蔓延したのは、居住環境による。宿舎である飯場は3、4棟で、多いときにはそれぞれ60人くらいいて、6人から20人ほどの大部屋だった。だから、風邪がはやれば蔓延する。また、食生活の悪さもあった。麦飯と漬物、ちょっとした干物、干し大根のみそ汁が毎食の定番であった。農家出身のAさんにとって麦飯は初めての体験だった。副食を家から送ってもらい、休日には町に買い足しに行った。休日の朝には飯場の前に買い出しの出稼ぎ者を待つタクシーがたくさん並んでいたという。

#### 粗末な食事

ええ。まあご飯はもう、すごく粗末なもんだったいね。だからこっちから送ってもらうんですよ\* 実家から干ニシン、マス、梅干し等、・・・なんちゅうかね。自分たちの方から。せばあの当時からさ、あのお、マスの酢飯とかさ・・・うん、それとあのお、筋子の乾いてまったような筋子ね。もうがりんとかじっても汁がなくなったような筋子。それがまあ大体まあ普通にありましたからね。そうゆうものが、まあ栄養補給っていうかね。自分たちのね。ただ、私たちは意外とそうゆうものはあ、豊富であったのですね、送ってきたものが豊富で、ええ。<じゃあ助かってたわけですね> そう、助かったいね。<それ自分であの調理するんですか?> いや、それ飯は自分でこ、飯場で出るんだけど、そのとき、ご飯食べるときそうゆうもの持ってって・・・ご飯はね、飯、私たちはさ、あ、ごく田舎のあれ\* 生まれだからほとんどご飯食べれたんですけども、麦飯っていうのが抵抗ありましたね。ええ。初めて食べたものなんですけれども。

東北各地や九州からの出稼ぎ者が町から離れて集団で生活する。部屋割りで重要なのは「心が合う」ことだった。

## 心が合う

部屋割りね、自分たちの心の合った人間だけ、ええ。大体6人、部屋くらいですよ。うん、でないと収拾がつかないんですよ。遅くまで起きて飲んで\*トランプ、花札で。・・・んーもうご飯食べれば<さっさと寝て>寝るとか。うん、あと、トラン、あの当時でしたらトランジスタラジオというのが、ちょっと普及してね。それを聞いて\*本を読んだりです。イヤホンで聞くとちゅうかね。ええ。・・・ええ。大体年頃の人間と(同じ)。

## 2) 語らい

飯場には他地域からの出稼ぎ者もいて交流の機会があった。津軽から持参の氷のうにいれたドブクは九州の焼酎と交換された。人数が多いので、食事は3班にわけて食べることになる。その班では秋田や青森県南部地方<sup>注1</sup>の集団と一緒にあった。青森南部地方の人と飲んだときの感想を次のように述べている。

### 津軽と南部

- A (南部と津軽の違いは) ありますよね。やっぱりさっきの飲みっぷりも全然違うもんね。
- S ああ、そうなんですか。
- A やっぱり津軽の方(かた)は、飲めないっっちゃうか、
- S ああ、そうですか？
- A 遠慮がちっっちゃうかね。遠慮がちなんだよね。ええ。
- S 南部のほうはどっちかってゆくと、遠慮なく飲むというか。
- A 飲むというかね。で今、あっちのほう、気持ちがでっかいっっちゃうかね。ええ。で津軽のほうは結構ちっちゃい集落ですので・・・向こうのほうの集落っていえば、話聞けば、もう隣があろう、何百メートルも離れてるっっちゃうか。大きい感じの開墾のね\*人間の心も大きいですね。
- S 入植地ってゆうんですか、そうゆうところから来る人は多かったですか？
- A やっぱりその方もやっぱり、なんっっちゃうか\*ヤマセの天候とか、まあ酪農から、うん。もう見放されたっっちゃうかね。最初はいかったんだけれども、やっぱり奥さんが病弱になったとか、子どもが病弱になったとか\*金がかかるとか、開墾に行っても、うん、家族のその、元気(で協力)がなければでっかい、開墾は出来ない。

津軽が遠慮がちで、南部が遠慮なしという対比もおもしろいが、後半部分では出稼ぎ者の背後の事情をかいまみることができる。このような話によって他地域の実情を知ることができたのであろう。

## 3) 一匹オオカミ

飯場には「心の合った人間」ではない人間もいた。対照的に語られている。

### ほっぺに傷

- A ええ。で、やっぱり一匹狼って昔からいたんですよ。例えば、あの九州の長崎から来たとかって、ずーと(不明)しての。であの、発破とかそういうのやったってあの、

体、あのほっぺには発破のあの傷ね、いっばいついた人間がいてさ。で、やっぱりそういうの一緒に仕事したりすんだけど、やっぱり話しもかけられないしね。

S ちょっと怖いですね。

A ええ。で、今度、くだ巻くんですよ。もう少し楽な仕事させるとかってね。で、それはやっぱりあの、各部署に一人や二人いるんですよ。で、まあ拒否することも出来ないしね。で、親方が、世話役が大体それを丁度良く、やってね。

S この一匹狼の人も世話役が連れてくるんですかね？

A いや、それはあの一昔からそこに居座っているみたいなんですよ。

S は一なるほど。

A で、親方でも拒否できないみたい。ま、暴力っっちゃうか、いたずらされるっっちゃうか。ま、いたずらっっちゃうか、なんかの仕返しがあるっっちゃうか。それがやっぱりま、向こうの暴力団とも繋がったりって話もね。

S は一なるほど。・・会社のほうからするとそうやって、あのう、親方に連れてこられる人を雇う、まあ安心といえば安心、なんですかね？

A そうそうそう。もう会社ではもう、一番いいお客、あの一人夫さんだわけだわいね。

S 身元もねえ、しっかり。

A しっかりしちゃうしねえ、東北の人間はまじめに働くって。

S は一なるほど。

A で、やっぱりこのう、あのう、ちょっと得体のわからないその一匹狼的なものはやっぱりまた、この組の親方が4、5人は置いてるみたいなんですよ。で、組同士のこと・・用心棒みたいな感じですよ。・・・うん、それはもう常識的な、あれでしたよ。その当時は。

「発破」「傷」「くだ巻く」「居座っている」「暴力」「暴力団」「得体のわからない」「用心棒」という表現は、親方に連れられた、心の合った「まじめに働く」、出自のはっきりした「一番いい人夫」である津軽の出稼ぎ者とは対極の特徴を示している。津軽の出稼ぎ者の特徴を浮かびあがらせる。

## 7. タコ部屋

次の「タコ部屋」はAさんらの飯場の対極にある。このタコ部屋の話はAさんが逃げだす場面から始まる。昭和33年か34年、18、9歳のころ、大手K組はタコ部屋だという噂があった。亀戸から錦糸町までの地下鉄のトンネルの工事だということで飯場に入った。1週間ぐらいたったところで「今日全部に、荷物まくって、行くはんで」（荷物まとめて行くから）と言われ、なにも持たないで出てきた。

### タコ部屋

A ただ一番最初、18か19の時、18だべな。〈うん〉33年か34年のあたり。〈うん〉あの、K組っていうところに〈はいはい。大手ですよ〉大手なんだけども。名前聞いただけでもその当時から噂があって。タコ部屋だって・・うん。その地下鉄の隧道が、トンネルが

あるということで。・・かれこれ、1週間ぐらいいたべか。・・して、今日全部に、荷物まくって、行くはんで、って(と言われた)。12時頃、あの、なんも持たねえで出たんですよ。・・私たちは学校の方さ行ったんですよ。高校……。ちょっとわかんねえ、そういうとこさあの、親方がね。そっちの方さ。私たちは全然その地理がわかんねかったけど。親方はやっぱり経験豊富だもんだとこで。そっちのほうさ逃げてさ。・・一晩暮らしたんですよ。

A あの時、8人、12人ぐらい行ったんけども、7・8人が語らって・・<逃げた>逃げたの。ただあの、田んぼもまだあったしね。その当時はね。田んぼの中歩くのはこっちは、お手のもんだよね。・・もう朝、あの、入梅前のときだべな。小雨がぱらぱらって降ってさ。雨降った晩下(ばんげ)であったんですよ。

.....<中略>.....

A ざーざーと雨降ってさ。うん。で、今みたいにナイロンのかっぱとか何もねえし、ゴムかっぱでね。でもなんも着ねえで逃げた。おらたちは。

S あ、親方も知らなかったんですか。

A いや、給料がいいということで。タコ部屋だというのはわかってたんだけど.....まさか、という。して親方同士の話でほら。行ったらしいんだよ。

S うーん。

A で、青森県だって言うことはやれって言ったものやるって言う、その、うん。して、もうみんな田舎弁で、標準語きかない人間ばっかりでしたもんでね。親方がちょっと話せるぐらいで。私たちもほとんど津軽弁なんですよ・・正直言って。で向こうにいて、ひとつしゃべる、ふたつしゃべるでなんぼか、ま、標準語は聴けるんだけども・・標準語でしゃべるのができなくてさ。そういう関係で、親方のまた親方が覚えてる人がK組のあれになって、そっちのほうさ移ったんだけども。・・給料いいべ、ってな。ついて行くべ、ってこうなって。せば行くべってことでみんな語って行って。

青森県の出稼ぎ者は親方に従順な人たちだとされていたこと、出稼ぎ者が標準語を話せず、親方に頼っていたことが語られている。親方と親方との話し合いだけで条件がきまっていた。出稼ぎ者は完全に親方に依存していた。親方のネットワークを「覚えている人」と表現したことに留意しておく。

タコ部屋はどのような場所だったのだろうか。そこで出会った人びとはいままでいた飯場では出会ったことのないタイプに思えた。

ひどい所

S そんなにひどい所だったんですか。

A ひどいって、もう、入れば、仕事してれば苦労はなんもねえんだけど、入ってきてから、丸太一本のイスなんですよ。ずーっと。して、机がさ、丸太半分に切ったやつ机にしてくうん、うん>それが寄り合ってたんだけども、3本くらいこう、寄り合わせたのがな。一つ入るに、ま、大体このぐらいだべな。<そこで食事するんですか>そこで食事。して、



ちょっと脇みたりすれば向かいの人に大根取られたりさ。

S どういう人が来てたんですか、それは。

A それはさ、犯罪者だってあったよね。

S はあ。

A で、私たちも、「わたし」（津軽方言で「私たち」）って変だけども、おれたちもさ。もう、「わたしよー」ってこうやって、津軽弁でしゃべるんだ。

S ええ。

A したらいきなり、どこの人だかなんもわかんねえわけだ。

S うーん。なるほど。

A 顔みんなこういう顔だから、津軽弁か、津軽とかって。で、あっちさ行きゃ、ひげ、なんぼでもおがかしちゅうんだよな（はやしている）。うん。無精ひげな。で、どこの人だか、わからなくなってしまう。してもう、風呂さ、行ったとこ入ったんだけども。風呂さ入ったらもう、背中に入れ墨の人間ばりもう、何十人っていてさ。

S そうですか。

A うん。で、おら飯場一回戻ってきたもんね \*風呂に入れず、戻ってきた。

出会った人びとはこれまでの「心の合った」飯場の仲間とはまったく異なる人間として描かれ、自分たちもそのなかに入れられた驚きが率直に語られている。出自のはっきりわからない人びとへの恐れ、自らそのように扱われる恐れが語られている。

次ぎの語りは、逃げ出す夜を思い出しながら、当初からおかしいと思っていた飯場の様子を語っている。

見張り小屋と裸電球

A タコ部屋はさ、行ったときはもうすごい料理でたまされて。

S あ、最初は。

A うん。で次の日から2日働きに出て。3日見ないで出たくなつたな。

S あー。すぐわかっちゃったんですね。

A うん。いや、話輪さかけて、インチキくせえんだよね。して、あの、角っこにさ。会社の角っこにあの、建物がああ、見張り小屋があるんですよ。して晩になれば電気ついてさ。人いるかないかわかんないんだけど。電気つくんだよね。して普通の、今のこうした農家で、農家って田舎の、昔の電気あるでしょ。裸電球。<はいはい>あれが下がって見えてるんですよ。・・・今日はいないと（わかって）・・・\*逃げようと話し合った。

で、飯場の下の下が土間でさ。コンクリでないんですよ。して、飯場のその、敷居が汚いしな。醤油の臭いっちゅうのか、みその臭いっちゅうか、独特の臭いしてさ。うん。して、あの、入り口はすごいんですよ。家、もう、あの、なんつうんだあの、門構えが。うん。立派な門でさ。・・・裏こう回って行けば、すごいんですよ。波トタンの屋根でね。して雨降っちゅうとこで、雨の音がうるさくてさ。

うん。たげ降って、11頃になったら小降りになったんだびよん。あれ確か。で、なんも

仕事しなくても寝られなくてさ\*逃げようと話し合った。

A したら、(現場に行くのも)全部あの、幌の付いたトラックだもんだとこで・外がなんもわかんないわけさ。

S なるほど。見えないようにしてる。

A うん。してたまにこう、見てたところが、バスの停留所が砂町とか東陽町とかってよ。ついてね。して行けばすぐ水道だとして。トンネルのなかだとか。

S あ、地下に入っちゃって。

A 地下にすぐエレベーターに乗って降りてまうとこで、全然方向なんもわかんねえのな。

S なんか拉致されたみたいですね

入梅前とはいえ雨が降っている。異臭のする飯場で所在なく雨音を聞いていると、波トタンにうちつけるつぶてのようだった雨音が弱まっている。窓から見ると、いつもは見張りがいる小屋に人影はなく、裸電球のあかりがもれている。親方が誰かと話している。「荷物まくって行くはんで」。声がかかると、みなは何も持たずに立ちあがる。門を出たがいいが、ここがどこなのかわからない。幌つきのトラックで現場まで送られ帰ってくる生活だ。もとよりトウキョウの地理はわからない。親方が走る方向について行く。田んぼのなかは慣れたもんだ。ぬかるみを仲間たちと逃げていく。

逃げた後、親方が電話で元の会社と交渉し、戻ることができた。この事件の原因は親方が他の親方の話を鵜呑みにした失敗である。しかし、親方への信頼は失われることはなかった。

いい親方であった

うん。行ったんだけど、親方もまさかこういう所でねえって、みなさん迷惑かけてまったって、膝折ってあやまってな。・別な、あれさ行って。毎日飲ませてもらったもの。その当時は。〈あー親方も申し訳ないと思って〉うん。申し訳ないってよ。それでもここさ来て命拾いしたと(もとの職場に戻って、命が助かった)。やっぱり親方もいい親方であったとこで、わたちもずーっと(一緒に)行って、うん。コミュニケーションとして。いつ頃行けるって、声かけな。いつも声かけてもらってさ。〈あー、そうですか〉うん。けがすりゃあれだはんでって、けがはしないようにってな。いっつも声かけてもらってさ。

「声かけ」という言葉が使われている。かれらの出稼ぎ集団は稼働時に親方から心あった人間と認められ、声をかけて形成される。呼びかけられ呼応した集団である。「声をかける」は縁故就労の倫理的側面を示す表現である。しかし、タコ部屋の人びとは「声かけ」に応答して集まった人びとではなかった。Aさんたちにとってかれらはフィルターで濾過されていない人びとに映ったのである。

## 8. 津軽へ

### 1) 長男と書いて「使命」

Aさんは、出稼ぎの稼ぎを家族の生活や、家産を増やすのに使ってきた。インタビューでは「長男という・・・肩書き」だったからだと述べ、校正するときには「使命」と書き入れた。

## 稼ぎの使い道

A それは私のときはさ、まうち兄弟もありましたので、兄弟のあの一進学・・・勉強のために、うん、\*自分の将来に分けてくれた\*通帳と。

S は一なるほど。

A ま、その当時では1万円ぐらいくれればもう、最高のあれ\*小遣いでね。・・・だから私も、弟たちはもうみんな、うん、高校にも行けたしねえ\*妹を嫁に出したり。

S はあ、そうですか。

A 私は行けなかったとこで、ええ。こ、高校の授業料とか。小遣いとかね。ええ。・・・姉が一人、妹が一人。弟が3人。

S やっぱ昔、兄弟多かったですね。

A したらやっぱり長男、というあの、そうゆう肩書き\*使命で生まれた。あのま、そうゆう田舎のしきたりで、長男がしっかりしなきゃだめだってゆうのは、やっぱり言いつけられ、孫ばあちゃんとか、ね。

S そうでしょうね。

A ああ、やっぱりみんな稼いだ分ね、親が稼いだ分ね。うん。私本当にあんまり残せなかったけど、まっ兄弟の面倒みるちゅうか、そうゆうあれは、意識はね結構ありましたから。ただ今は、里帰りしてな、集まったときに・・・盆正月は会うだけけれども、あの結構ね兄貴には世話になったよとか。

父親は出稼ぎのお金を土地に換えていた。Aさんはその土地を兄弟がいつ戻って来てもいいよにしておくのが兄としての使命と考えていた。

A それはね、家でもま、子どもたちには、兄弟には、財産分与とかはあんまりね。でもうちの親父はその分あの、私稼いだ分で、あの、色んなとこに不動産\*小さい土地持ってたんですよ。うん今でも、田畑、墓守していく人は多くを持つと、家から出たものにはあのま、これぐらいと。お金ではあげられないけども、不動産には何ほか、全部名義書き換えてね。で、親父(不明)亡くなったから、あのあれだけでも、私の子どもたちにはそうしてあげてますよ。土地不動産あの、今でもあの、山とそういうもんを持たせて、名義東京とか、\*分けてありますね、その上にまっ家建ちゅうから、まっ売ればだば、まっすぐく安いと思うけど。土地は持たせてあるんですよ。

名古屋にいる弟夫婦はむこうに家をもち、子どもたちと暮らしている。最近墓まで建てたという。しかし、もどってくる可能性があると考えている。Aさんは出稼ぎの稼ぎを送金し、兄弟に教育を受けさせ、土地を増やしていった。その土地は兄弟がもどってくるための土地でもある。Aさんのまなざしはつねに、家族にそそがれている。津軽にいる者は外に出た家族に「いつかもどってくる」という期待を抱き、出た家族も自分がその期待のなかにいることを知っている。

なんかあるか分からないので

だから、名古屋にいる弟にも120坪ぐらい持たせし、そのほかの兄弟にも同じとこに持ってあって、それ原野なんだけども。それ私と二人の名義にして、で、なんかあった場合は私が責任持って

ちゃんとやってやるからと。いつ人間ていつあの、なんかあるか分からないので<そうですね>誰の名義にすればまいねと、そうゆうふうなあれもあるんだけど、そこら辺は私が兄貴としてちゃんと見張ってやるからと\*私が管理しています。せ、いいときに売ればいいしと。こっちさか帰って来ればそこさ家でも建てればいいしと。そこまでやっぱり兄貴としてはさ、やってやんないばな(やらなければならぬだろう)。

## 2) 地元への配慮

ほとんど1年を通して稼働するAさんにとって、帰省したときには地元の人びとへ配慮を欠かさなかった。「当時は消防とかああいうの一番心配」だったので、青年団(消防団)に「夜回りして回るために少し寄付を大きくあげたり」「大雪降った場合はあの、道路、橋の除雪ちょっと多くやって回ったとか(道が通れないと消防が入ることができないので)」といった気遣いはしていたという。さらに、気を配ったのは友人関係だった。

待ち焦がれる

A ちょっと1年通してつてば、やっぱりさ。友達とのその、あれが、疎通がなくなるっちゅうか。・・そういうのがやっぱり懸念されてあったもんね。<やっぱ心配だった>それが第一だね。うん。経済的にはいいんだけどもさ。コミュニケーションちゅうか。それがやっぱり欲しいっちゅうか。その当時は電話もあるんだけども。はがきの取り引きね。あれで、よく。

S あれですか友達からちょっと外れるっていうか。

A うん。それはないけどもさ。・・でやっぱり、うらやましがるんだよね。ほら、農家ならまあ雨降ってもなんでも仕事やって、そのわりに秋収穫なんないと、やー、われわれはドカタやってれば、出稼ぎしてれば<ま、金には不自由ないと>そのため方が、まあ、なんぼかあれあるけどね。そういうの妬まれるのが多くてさ。<そういうのあるんですか>もう友達はあくまで友達だはんでな。先輩、後輩ね。でやっぱり、面倒はやっぱり、私たちのほうが、私が多くみてくれたっちゅうか。<その、なんですか、妬まれるっていうか>いや、あの一、待ち焦がれるわけさ。いつ来んだかって。・・うん。せば金持っても(妬まれてしまったら)なんもなんねえはんでって。そういう、抵抗はあったよね。

## 3) その後

親方に連れられて出た最初の出稼ぎからタコ部屋までAさんの語りをたどってきた。それは親方の声かけによって形成された地元の間人関係のなかで、出稼ぎに出た追想である。

Aさんのその後をまとめると次のようになる。その後、同じ親方のもとで、昭和40年、横浜南区の隧道掘り(下水道)に3カ月つとめた後、同年、神奈川寒川の県浄水場建設、そして、最後に、昭和42年、横浜港のドルフィン建設に4カ月従事した。現場では機械の操作や作業の責任者や出面管理をまかされるようになった。機械化もすすみ、飯場も相部屋や個室にかわり、トイレも水洗化されていった。しかし、親方に声をかけられ出稼ぎにでる就労形態は変わらなかった。

昭和42年(26才)のとき、結婚するために地元にもどった。バイクの事故で足をケガしたとき

に、地元の拝む人に「その人は今まで稼いで、あんまり仕事した人だはんで。これ休めっていう神様からのお告げだ」と言われたこともあった。しばらく、ろう原紙など謄写版製品などを扱う会社の運転手をしていたところ、父を「覚えている人」に「声をかけられ」、印刷所に勤めることになった。

覚えてた

(謄写版の印刷をしていた印刷所と) ろう原紙の取引があって、私が配達に行くと・・・で、まあ、たまたま一服して行けと。お茶飲んで行けと、ということで今度(社長と)話っこしたら、ま、名刺っことも渡して。前からあるしね。そのAってのは苗字、なかなか無いと・・・したらまあ、(地名)のほうだ、っていうことで。せば、学校と一緒にいった、まじめな、あの、若者(Aさんの父)がいたと。・・・うん。(Aさんの父を)覚えてたって。で、実はうちで息子さんあの、亡くして。車買ったばかりで、その、無いんだと。子どもいないんだと。誰も跡継ぐ人いないんだと。で、私に、いや、もしかしたら、手伝える若者いないかって。

地元でも、「覚えている人に声をかけられ」た就労である。Aさんの就労は一貫して縁故就労だったのである。

Aさんは定年を前に、地域への貢献を考えている。

恩返し

A 多少、自分の足跡を振り返ってみて、反省すると反省して。今後はね。

S うーん。いろいろと、やりたいことも色々ありませんか。

A あるしね。町会にも協力しなきゃだめなものもけっこうあるし。

S うーん、といたしますと。

A うん。ほら、今まで自分ひとりで、一匹オオカミ的なあれで来ましたので。・・・なんかの形で恩返ししなきゃだめだなーって。・・・人がいないから日中は出れないからな。あの、人に頼るだけですので。寄付だけはよそよりちょっと多めっていうのは昔からね。

飯場で出会った一匹オオカミは周囲の人間が地元との関係から根こぎされた人間として現れた。地元にもどったAさんは自身が地元では一匹オオカミ的存在ではなかったかと考えている。出稼ぎ先に身体をおいたとき、一匹オオカミは自分たちを対照する表象として現れた。しかし、地元にも身体をおいたとき、その表象は自分自身に振り向けられたのである。

## 9. トウキョウを作り、津軽に生きる

Aさんの出稼ぎは高度経済成長期における縁故就労の例である。地元の人材のフィルターである親方に連れられた、「心の合った」同郷の出稼ぎ集団が就労する。集団の仲間は出稼ぎだけではなく、地元にもどっても交流があった。それは、親方に「覚えられて」「声かけられた」人びとである。飯場では、「心の合った」仲間と寝起きし、同宿の他地域の出稼ぎ者と酒を飲んで、各地の実情を知った。現場の仕事は仲間との共同や分担が必要な土木建築現場である。それも仲間意識を育てただろう。一匹オオカミとタコ部屋のエピソードでは、一匹オオカミは地域や人との繋がりを



たない人間として、タコ部屋は背景のわからない人間の集まった場所として語られた。これは逆に当時の出稼ぎが地元の親方や近在の仲間たちといった、見知った人びとと親密性の高いつながりの中で行なわれていたことをよく示している。

現場の仕事は重労働だが、日雇い時給だから「稼げるだけ稼いだ」、残業もした。稼ぎは津軽の家族に送付し、親兄弟の生活や将来を援助し、家産を増やすのに使われた。地元にかえった短い期間、Aさんは残っていた仲間との人間関係も大事にした。また、地元の共同作業には積極的に参加したし、不在中の迷惑のために寄付を置いていたりしていた。その結果、Aさんは家産を増やし、子どもたちを地元に残すことができた。さらに、いつ兄弟が帰ってきててもよいように土地を用意している。現在、これまで十分にはできなかった地域への貢献を考えている。

私たちはAさんの語りに失業保険、賃金格差といったマクロな制度的、経済的背景から、縁故就労、飯場のつきあいといった現場の状況、地元への配慮や貢献といったミクロな出稼ぎ者の心性までを見いだすことができた。分析の中心は、親方による縁故就労による紐帯の形成であった。出稼ぎ者は個人として就労するのではなく、「覚えられ、呼びかけられ」召集された人びとによる凝集性の高い出稼ぎ集団の中で稼働した。それは地元と稼働先を対象化する結果をもたらした。本論は、出稼ぎ者が地元との紐帯からはずれて一個の労働力、「歯車」となるのをさまたげる津軽の縁故就労の特質を事例レベルで示すことができたと考える。紙幅の都合で、親方に連れられた高度経済成長期の出稼ぎだけを扱った。しかし、Aさんのような縁故就労がそれ以後も津軽の出稼ぎの中心であり続けたのである。

オリンピックをはさんだ高度経済成長期の首都圏トウキョウで、Aさんは大規模湾岸埋め立て、幹線道路・地下鉄・浄水施設・上下水道整備・港湾施設の建設に従事してきた。それは、まさにトウキョウの下部構造を作ってきた歩みにほかならない。同時に、出稼ぎという、トウキョウと津軽を往復する実践が津軽という場所をつくってきたことも忘れてはならない。「心の合った」仲間と酒を飲むとき、仕送りを現金書留の縁緑の袋を封緘するとき、一匹オオカミを恐れ、タコ部屋から逃げるとき、出稼ぎ者はいま・ここでの生活に身を置きながら、故郷の家族や友人を思い、帰省してからはいま・ここにいる家族や友人のもとに身を置きながら、出稼ぎ先の生活を想起する。地元、津軽はたんに家屋敷や田畑がある地理的な場所ではない。筋子や乾物が送られてくる差出であり、現金書留で仕送りを送り、はがきを出す宛先であり、飯場での他地域の人びとの対話の中に現れる故郷であり、盆や秋に帰省し友人と飲み歩く町であり、進学し就職する兄弟や嫁に出る姉妹が暮らす場所であり、病気の父と母が世話をする果樹園である。出稼ぎ者にとって、出稼ぎ先の生活は半年後に帰る故郷を、故郷での生活は1ヶ月後に戻る出稼ぎ先の生活と意識的にも実際的にも結びついている。それぞれの場所が表象として対象化されるというだけではない。往復する出稼ぎ者の身体は対象化された先に必ず戻っていく。身体から遠くにありて思われた場所へもどっていき、その場所に生きる。この往復運動がトウキョウと津軽を身体化していった。出稼ぎ者はトウキョウを作り、津軽に生きてきたのである。

おわりに：語りの贈り物

本論では、語りを、私と語り手の間でライフヒストリーというプロトタイプにそって生成された

語りをとらえる立場をとった。それは語り手と聞き手の特定の関係を越えた客観的なリアリティをめざした語りではない。むしろ、語り手と聞き手の特定の関係のなかで、互いの経験や想像力を総動員して理解しようとするリアリティをめざしている。Kleinman (1988) は、治療者が存在に根ざした関与を通じて病者から病いの語りをひきだすことの重要性を12人の事例をひいて示した。語りの倫理性をいう箇所、治療者-病者関係は経済的取引ではなく、「患者の贈物であり治療者の贈物である」と述べている。思いがけないインタビューは私にとってAさんからの大きな贈り物である。杉万 (2006、58頁) は地域の規範 (意味) が変わる過程を贈与と略奪の連鎖として描いた。地域活性化のための新しいアイディアはそれを考えた革新者からの贈り物だが、感謝の返礼をされるのではなく、ただ略奪され、次の贈り物として別の人のびとに差し出される。その連鎖の持続が地域の規範 (意味) の変化なのだという。Aさんからの贈り物をどのような連鎖に組み込むのが私に問われている。

末尾になりましたが、長時間のインタビューに協力していただいたAさんに感謝申し上げます。

## 参考文献

- Atkinson,P. &Delamont,S.(2006). Rescuing narrative from qualitative research. *Narrative Inquiry* 16,1,164-172.
- Berger, P.L. & Luckmann,T.(1966). *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. N.Y.: Doubleday. (山口節郎訳(1977). 日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法 新曜社)
- Kleinman,A.(1988). *The illness narratives : Suffering, healing and the human condition*. N.Y. : Basic Books . (江口重幸・五木田紳・上野豪志訳 1996 病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学 誠信書房)
- 大川健嗣(1978).出稼ぎの経済学 紀伊國屋書店
- 大澤・郡司ベギオ・幸夫(1996).生命と内部観測 現代思想:特集・観測のパラドクス 青土社 52-78
- 作道信介(1991).近代化のエージェントとしての出稼ぎ:弘前児童相談所資料を手がかりにして 文経論叢 26,3,79-113.
- 作道信介(1997).新聞記事にみる青森県の「出稼ぎ」編制:近代化のなかの「出稼ぎ」試論、言説からのアプローチ 文経論叢 32,3,31-87.
- 作道信介(2005).平賀町A集落にみる出稼ぎのある暮らし:Push-Pullにおける「hold」という視点 出稼ぎ・過疎・高齢化研究会(でっこの会)編 平成13?16年度科学研究費補助金研究成果報告書 急速高齢化地域に関する学際的共同研究:近代化のスローモーションから先行する青森県津軽地域へ 37-69.
- 作道信介(2006).ホールドとしての出稼ぎ:青森県津軽地域、A集落の生活史調査から 村落社会研究 13,1,49-60.
- 杉万俊夫(2006).コミュニティのグループ・ダイナミクス 京都大学学術出版会
- 渡辺栄・羽田新(1987).出稼ぎの総合的研究 東京大学出版会
- 山下祐介(2006).青森県における急速高齢化の人口分析:周縁地域の人口論にむけて 村落社会研究 13,1,37-48.

<sup>1</sup> 津軽は青森市・弘前市などを中心とする日本海側、南部は八戸市・三沢市などを中心とする太平洋側の地域。藩政時代からのいきさつで、両地域は対照的・対抗的に語られることが多い

<sup>2</sup> Aさんが他にも「心の合った」という語を用いたのは、次の箇所である。Aさんは田植えの始まる前に出稼ぎに行く。田仕事はどうしていたのかという問いに「ええ。で田んぼ、作りもまあ互助会みたいのがあって、隣組みっっちゃうか。心の合った人間\*家族だけ、あのこうあって\*また本家を組長として、ええ、それで共同作業、ほとんどね。ええ」と応えた。家族的な親密性を表現するイディオムかと思われる。